



フランスの作文教育 : フレネ教育の作文集における 「著者」の問題

枝廣, 直樹

(Citation)

教育科学論集, 27:7-14

(Issue Date)

2024-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100489608>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100489608>



フランスの作文教育

—フレネ教育の作文集における「著者」の問題—

Composition Education in France

Author issue in composition collections of Freinet Education

枝 廣 直 樹

EDAHIRO Naoki

（人間発達環境学研究所・博士課程後期課程大学院生）

キーワード：作文教育 Composition Education, 作文集 Composition Collections,
フレネ教育 Freinet Education, 著者 Author, 教育関係論 Educational Relations,
初等教育 Elementary Education

はじめに

本稿はセレスタン・フレネ（Célestin Freinet, 1896-1966）が実践した作文集の内容と変遷の特徴を明らかにすると共に、子どもが著者（auteur）となることの意義を考察することを目的とする。

フランスの作文教育については、テキストの説明の授業、語彙を増やすための作文の授業、作文を元にした話法の授業などの特徴があるが、波多野（1968）は、フランスの作文教育はギリシャ・ローマ時代からあまり変わらず日本と比べて遅れていると評している。彼は、フランスにおける伝統的教授法の改進黨の試みとして、フレネの「自由テキスト（texte libre）」を挙げる。自由テキストは日本の生活綴り方実践と似ているとし、自由テキストの優れている点として、作文と並んで知識のための自学方式を工夫したと高く評価している¹。フレネは学校の学びに自分自身の知識を持たせようと、自由テキストを元にした作文集『麦束（La Gerbe）』、『童心（Enfantines）』等の発行により、子どもが著者となった学習材²を教室において活用する実践を行った。教科書が文部科学省による検定で定められている日本では見つけることのできにくい実践である。しかし日仏双方の不理解から日本へのフレネ教育、自由テキストの紹介はほとんど途絶えてしまう³。

子どもが著者となった学校での学びを提唱する論として佐藤（2022）が挙げられる。佐藤は学校での学びに自分自身の知識という実感が薄れていると指摘する。彼は、教科書の知識は著者を喪失した非人称の知識（＝「情報」）とし、「知識」として学ばせるためには、学びに「著者性」を復権しなければならないとする。また、学びから「著者性」と「真正性」が奪われると子どもの学びの疎外が深まり、知識と学びをめぐる「所有」と「競争」の文化に教室が支配されるとする。彼は知識の学び方を学ぶ必要を説き、そのためには子どもたち自身に協同で探求する学びを教室で実現させるほかには道はないと指摘する⁴。

フレネによる、子どもを著者とした作文集の実践を研究することで、知識と学びをめぐる「所有」と「競争」の文化から教室を開放し、学校の学びに自分自身の「知識」を持つための方策を得

たい。フレネの自由テキストや作文集の先行研究として以下の 3 点がある。

佐藤（1995）は、自由テキストをもとに、作文教育について提言する。彼は「書くこと」をどのような人間関係の中に位置づけるかが問題であり、子どもの自由な生活表現は多様な水路によって子どもから出されることが必要であると説く⁵。佐藤の提言は「書くこと」における子ども一人一人関係を考察する点で重要であるが、佐藤を含め、日本で『麦束』『童心』などの作文集を主にして論じているものは見あたらない。

コナック（Connac S., 2010）は、フレネ教育の 4 つの概念的柱を挙げ、そのうちの一つ、「表現の自由」について、言葉、絵、ジェスチャー、音楽、彫刻などの著者になることを許可され、またその作品を大切に空間があることと説明しているが⁶、彼はフレネの教育概念の柱が著者であることを指摘するにとどまっている。

ゴ（Go N., 2022）はフレネ教育の特徴に知識と生産のつながりを変容させる点にあると述べ、自分自身との関係の変容（著者になること）と、他者との関係の変容（協同著者になること）により、環境（世界）との関係が変容すると述べる⁷。

他にも自由テキストや作文集についての言及はいくつかあるが⁸、フレネが発行した作文集の内容を主題とした研究は海外においても見あたらない。そこで本稿は、フレネが発行した作文集の内容に焦点を当て、その成立過程と内容から考察を行う。特に自由テキストが発足し、作文集の発行がフランス国内外に広がりを見せる 1923 年から 1940 年の時期を研究対象とする。第 I 節において、フレネやフレネ教育活動家により発行された作文集の成立と変遷を追う。次に第 II 節において、この時期に発行された子どもの作文集『童心』106 冊を中心にフレネの作文集を量的・質的に検討する。最後に第 III 節において、教育関係の再構築の視点から子どもが著者となることの意義を考察する。なお、本稿における作文集やフレネ及びフレネ関係者による文献は筆者の 3 度に渡るフランス訪問時に収集したものとフレネ教育運動のホームページにおいて電子データ化されたものを主に利用した⁹。

作文集などのフランス語原典について日本語訳を利用したものは注に訳者名を記載した。訳のないものは筆者が翻訳を行った。

I 作文集の成立過程

1923年、フレネは数匹の蝸牛にレースをさせていた子どもたちの生活や思考を表現するテキストを固定し残すため、ポータブル印刷機を教室に導入する¹⁰。これが自由テキストの始まりとなる。1924年、フレネはフェリエール (Ferrière A.) が「生活ノート (cahier de vie)」と呼んだ子どもの主要な興味が綴られた文章を印刷することで、口頭の教育と書物の教育という二面性が解消されるとし「生活の本 (livre de vie)」を作成する。さらに、フィニステールのダニエル (Daniel R.) の学校へ送る「学校間通信 (correspondance interscolaire)」を始める¹¹。

1926年には、ダニエルやフェリエールを含めた8名での交流を始める。内容は、(1) 似たタイプの2学級による毎日の学校日誌の交換、(2) 印刷参加校全校による2週間毎の交換の2種類で

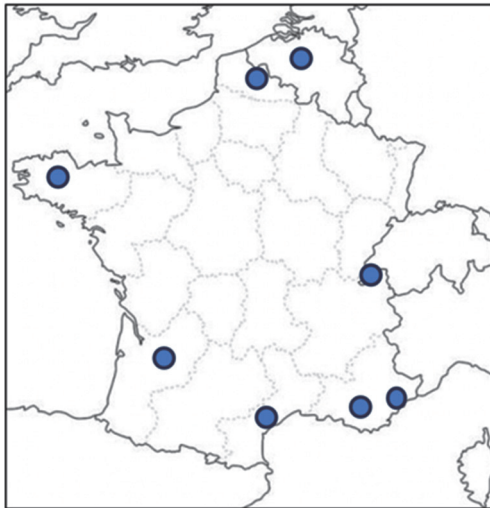


図1 1926年に印刷物交換を始めた地域
Célestin Freinet, « L'imprimerie à l'école - Première lettre circulaire » juillet, 1926. より筆者作成

ある。印刷物交換を始めた地域 (図1) を見るとフランス国内外で広く始めたことがわかる。1926年12月に12校、1927年4月に23校と、急速に増える印刷校に合わせて、印刷物の交換では間に合わなくなったため、それぞれ子どもたちにより学校で印刷されたものを一冊にまとめた形の冊子『麦束 (La Gerbe)』第1号が発行される。毎月発行で、第1号には3歳~13歳の子どもの文や学校 (学級) で作成した9つの話が入っている (図2)。50部は1フランで販売され、紙代、表紙代、製本代などの必要費用に充当された。フレネはこの冊子の利点を4点挙げている。(1) 教育的改善、(2) 印刷の改善、(3) 学校間のつながり、(4) 学校印刷の宣伝である。この冊子は大成功を収めたとされる¹²。

同年、特に重要な文章、長い文章の選集であり、学校印刷所で印刷した『麦束選集 (Extrait de La Gerbe)』第1号が発行される。内容は『麦束』第1号第5話、「山の中の小さな少年 (Un petit

- 1 「小さな旅人の冒険」 ヌヴィレット (11.5歳)
- 2 「ブルー通りの夫人」 ヴァール (13歳)
- 3 「ベケナン」 パール・シュル・ルー (18歳)
- 4 「熊の冒険」 ブシェール
- 5 「山の中の小さな少年」 マルギュエット
- 6 「遠足」 アルデンヌ
- 7 「海の中のボトル」 トレガン
- 8 「ライオンとネズミ」 ブリュッセル (3歳)
- 9 「熊と狐」 ドルドーニュ (11歳)

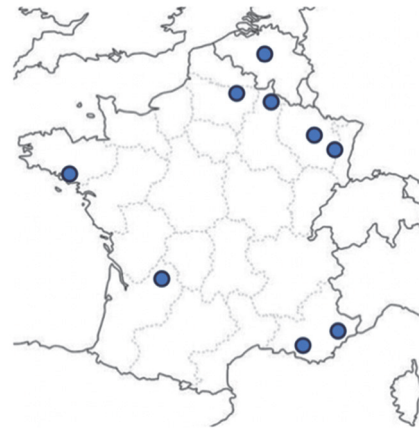


図2 『麦束』第1号の目次にある題名 (鉤括弧内)、作成された学校のある地域、著者の年齢 (丸括弧内)

Édition de l'imprimerie l'école, « La Gerbe n°1 » Avril, 1927.
より筆者作成

garçon dans la montagne) の完全版であり、1フランで販売された。裏表紙に「自分のような子どもたちの生活、思考、行動、遊び、夢を読み、学ぶことができる¹³」とある。創刊号の「山の中の小さな少年」はサン・マルギュエット (オート・アルプ) の学級で生まれ、その学級の担任は、フレネの妻であるエリーズ (Freinet E.) の姉、マリー・ルイズ・ラジエ・ブルーノ (Bruno M.) だった。『麦束選集』は、後に彼女を中心に『童心 (Enfantines)』と呼ばれるコレクションの始まりとなる。『童心』は、初めは『麦束選集』にて発表された作品の再録であった。1932年ごろから『麦束選集』の全ての作品が『童心』のコレクションとしてまとめられた。この頃の作文集の購読者数は2200名ほどであった。

1937年、フレネは論文「もう教科書も授業もいらない」を発表。豊富に揃った『麦束選集』、『童心』などの学習材をもとに、「学習計画 (Plan de Travail)」を立て、子どもたちで学習を進める学習法を推進する¹⁴。

『童心』は191-192合併号を最後とし、財政不足を原因に1954年に打ち切られるまで毎月の発行が続けられる。

作文集の成立過程において以下の2点を指摘したい。一つに、作文集はフレネの言うように子どもの自由な表現を書き留めるものとして成立したことである。また一つに、宮ヶ谷も指摘するように、作文集は初めから教材 (学習材) としての使用が目指されていたわけではない。作文集の充実に合わせて、1930年頃から特にフレネに賛同する教師の教室を中心に学習への活用が進められていったのである¹⁵。

Ⅱ 作文集『童心』の内容

本節では、1927-1954年に発行された『童心』全189冊のうち、1927-1940年（第二次世界大戦前）に発表された106冊を分析する。前半に限定するのは、（1）作文集の形成時期とフランス国内外にダイナミックに展開していった時期に焦点を当てるため、（2）第二次世界大戦により約5年間の作文集発行中断が見られたためである。前半の『童心』を分析することで、以下の特徴が浮かび上がる。

- 1 自由な表現の広がり
- 2 筆者の広がり
- 3 学びの広がり

本節では上記の一つひとつを作文集の数値を纏めたものから分析する量的考察と作文集の内容から分析する質的考察に分けて論じていく。

1 自由な表現の広がり

（1）自由な表現の広がり量の考察

1927-1940年の『童心』誌上に掲載された読者の対象年齢によれば⁶、6-7歳向けが20冊、8-10歳向けが59冊、10-12歳向けが26冊となっている（図3）¹⁷。結果からわかるように8-10歳

年齢（歳）	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	合計
著者（人）	0	0	1	2	7	14	15	24	14	2	1	80
著者（%）	0.0	0.0	1.3	2.5	8.8	17.5	18.8	30.0	17.5	2.5	1.3	100.0
挿絵（人）	1	1	1	1	2	1	3	2	2	2	0	16
挿絵（%）	6.3	6.3	6.3	6.3	12.5	6.3	18.8	12.5	12.5	12.5	0.0	100.0
合計（人）	1	1	3	6	18	33	37	56	34	7	2	196
合計（%）	1.0	1.0	2.1	3.1	9.4	15.6	18.8	27.1	16.7	4.2	1.0	100.0

図3 1927-1940年『童心』の著者・挿絵の年齢別人数および割合
『童心』1927年1月-1940年3月の内容をもとに筆者作成

向けが特に多くなっている。また、著者名に年齢記載のあるものが80人おり、12歳が24人（30%）で最も多い。10-13歳が合わせて67人（83.8%）となっていることから、著者の年齢層は12歳前後がほとんどと推測される。挿絵に関しては、年齢が確認できる16人のうち、最多が11歳の3人で、10-13歳で8人（50%）となっている。対象年齢の偏りと対象年齢及び著者年齢のずれから、教師や世俗教育協同組合¹⁸（la Coopérative de l'Enseignement Laïc, 以下C.E.L.）が意図的に操作するよりも、子どもの興味を重視し自由に書かせ、良い作品を自由に選んでいた傾向が浮かび上がる。

内容の確認できた103冊のうち、主人公が人間である作品が74冊、動物である作品が18冊、一冊の中で人間と動物と混在しているものが11冊ある。ちょうど真ん中あたりになるサンポール事件があった年（1933年度）¹⁹で分けると、動物である作品は前半4冊に対し後半14冊と増えている（図4）。増加の理由として、人と動物が混在している号冊が減っており（前半9冊→後半2冊）、各学校が文量の多い作品を作ろうとしたことに加え、各学校が動物を主役にした物語を作っていくとする傾向を強めたと考えられる。

	主人公人間	主人公動物	主人公混在	動物登場	家族登場	死	戦争	外国	擬人化	ファンタジー	作品集
1927-1940年度103冊中（冊）	74	18	11	78	73	44	7	14	25	35	15
冊数に対する比率（%）	74.8	17.5	10.7	75.7	70.9	42.7	6.8	13.6	24.3	34.0	14.6
1927-1932年度51冊中（冊）	38	4	9	41	39	22	2	3	10	17	11
冊数に対する比率（%）	74.5	7.8	17.6	80.4	76.5	43.1	3.9	5.9	19.6	33.3	21.6
1933-1940年度52冊中（冊）	36	14	2	37	34	22	5	11	15	18	4
冊数に対する比率（%）	69.2	26.9	3.8	71.2	65.4	42.3	9.6	21.2	28.8	34.6	7.7
前半-後半比率の増減（%）	↓-3.3	↑19.1	↓-13.8	↓-2	↓-11.1	↓-0.8	↑5.7	↑15.3	↑2	↑1.3	↓-13.9

図4 1927-1940年『童心』の内容
『童心』1927年1月-1940年3月の内容をもとに筆者作成

また、作文に動物が登場するものが78冊、家族（動物も含む）が登場するものが73冊ある。ほとんどの作品は農村が舞台であり、作品が書かれた地域はフランス内外広範囲にわたるが、パリ近郊などの大都市のものは少ない。作文集『童心』は農村部中心に広まったフレネ教育運動の様子を如実に表しているといえる。

作品中に登場人物（動物を含む）の死を表現したものは44冊（前半22冊、後半22冊）あり、半数の22冊は登場人物の死により物語が終わる。戦争をテーマにしたものが7冊あり、前半2冊は昔の話をまとめたものであるが、後半5冊はスペイン内乱やドイツ軍の侵攻により直接児童が見聞したものが生々しく纏められている。

作品中に外国（書かれた国以外の国）が登場するものが14冊あり、前半3冊、後半11冊と増加している。戦争の影響も感じられるが、上で述べたように、フランス国内で完結させない作品作りの意図が感じられる。

作品中に動物の擬人化、悪魔、幽霊、小人などが登場するものが35冊あり、ファンタジー作品であることがわかるが、うち24冊が擬人化のみであり、魔法や空想上の生物の登場頻度は少ない²⁰。ほとんどが子どもの見聞したものを元に纏められたと考えられる作品であり、子どもの生活の興味から生まれる自由な表現を最大限に重視する方針は一貫していると言える。

（2）自由な表現の広がり質的考察

伝統的な文章ではなく子どもの文章を重視するフレネの実践には賛否両方の意見が寄せられた。否定的な意見にはヴィクトール・ユゴー（Hugo V.）やヴォルテール（Voltaire）のような偉大な作家より生徒の書いたものを信じているというものがあった²¹。この後、右派からは自分たちの教育令に従わなかったとして、左派からは自分たちの共産主義的教育理論に従わなかったとして、同時に攻撃を受けた²²。フレネは子どもの文章を重視する理由について、「私たちは、生徒たちに文学を書くことを慣れさせたいのではなく、自分自身を表現すること、自分の考えを外に出すことを教えただけだ²³」と語っている。『童心』第7号「大きな祭り」ではサンタクロースの正体は親だと気づいてしまったという詩がいくつも登場する。日本の学校現場では殆ど見られない内容であり、自分自身の自由な表現を最大限尊重している証左と言えよう。

サンポール事件において、1932年に学級日誌『城壁（Les Remparts）』に掲載された以下の作文がフレネ反対派の張り紙に利用されている。

私の夢

物資を無償で提供しようとしないうサンポール市長に、学級全員が反旗を翻す夢を見た。

フレネ先生は先頭にいた。市長はフレネ先生に言った。

「本代を払いたくないなら、殺してやる。」

「いやだ。」

「飛びかかれ。」フレネ先生は言った。

私は飛びついた。他の者は恐れている。市長はナイフを取り出し、私の太ももを突いた。怒った私はナイフをつかみ、彼を殺した。

フレネ先生が市長となり、私は病院に行った。

退院すると、千フランを渡された²⁴。

子どもの夢とはいえ、市長を殺すという過激な内容である。偽善的な行為に反対するフレネは、自由な表現は子どもたちに考えさせる手段であると考えた。1929年末、フレネは『麦束選集』第16号「現代自由学校にて」に、教え子の一人が公立学校で実際に受けていた虐待についての証言を掲載した。フレネはこれについて、「私たちの選集は、子どもたちの生活を正確に描写したものだ。もしこれにより悪を明らかにするなら、それは私たちの生徒が自らそれに苦しんでいるからだ。したがって、この悪の原因を率直に指摘することが私たちの義務だと考えている²⁵」と述べている。教師や大人による子どもや動物への虐待の話は『童心』内に度々登場する。

第2号「二人の小さな鍔掛屋」には、ワインを飲む6歳の少年が登場し、第66号「逃げ場なし」ではタバコを吸う少年が登場する。親に捨てられて強制労働をさせられる少女（第77号「オーヴェルニュの羊飼い」）、両親をスペインの戦争で亡くした少女（第77号「犯罪」）など、当時の子どもを取り巻く厳しい状況が伺えと共に、こうして著書となることにより自己の経験を受け入れたり、意味付けをしたりすることができているであろうことは特筆しておきたい。

フレネが言うように、自分自身を表現し自分の考えを外部に出すことは成功しているように思える。こうして自己の経験の表出をしながらも、主人公が動物の話が増えていることも併せて考えるに、自己の経験を受け入れるために自分を動物に重ね合わせている傾向が生じていると言えるだろう。また、フレネ自身は明確に言及していないが、サンポール事件等に見られたフレネへの自由な表現に対する批判が、自己の経験の表出手段を動物への擬人化などの婉曲した表現に向かわせたと捉えるのは自然な考えであろう。

2 著者の広がり

（1）著者の広がり 量的考察

内容の確認できた103冊のうち、著者として155人の子どもの名前が明記しており、そのうち一人のみの名前のものが23人見受けられる。子どもの書いたテキストは教師も参加する共同体により選択され推敲されたのち、C.E.L.により選別され発行されるため、個人名のある作品についても基本的にグループでの作品（協同著者）と言える²⁶。

『童心』の頁数は第1、2号が8頁、3号から22号が10頁、以降は16頁（合併号は32頁）で構成されており、文章の内容により挿絵が付け加えられる。C.E.L.による挿絵も多いが、学校名や個人名のある挿絵も多く、文章の量によって字体の大小が変化したり、挿絵が多く取り入れられていたりしている。文章を書いた学校とは違う学校の挿絵が取り入れられていることも多く、文章を読んだ後で挿絵を作成したと考えられるものも多い。作品を協同で作成したと言える生徒数は大変多くなっている。

内容の確認できた103冊のうち、88冊が一つの話（物語、随筆）で構成されている。残り15冊は数点の作品を含める作品集（詩集、随筆集、物語集）となっており、後半になる程、作品集の形で発行が減っている（前半11冊、後半4冊）（図4）。また、詩集の発行は第3号と第8号のみであり、初期に見られた後は詩のみの発刊が見受けられず、後半は新たに演劇脚本の作品が2冊登場する。ここから、『童心』は各校で一つの話を作成したものや載せようとする方針が見える。並びに、『童心』の方針に合わせ、子どもたち（さらには教師たち）に学級で協同著者として一つの話を書く力がついていったと言える。

（2）著者の広がり 質的考察

第12号「4人の若者の冒険（実話）」は第1号「山の中の少年の物語」を読んで大喜びした子どもたちにより作成された。第1号の主人公と同じように山間地に住む少年たちは山での冒険の様子を生きたままに綴っている。

第69号「長い尾と金の羽」では、教室の中を飛び回り印刷機を発見して喜ぶ鳥の様子が描かれ、最後に猟師に鉄砲で撃たれる。第79号「ココの新しい冒険」、第89号「ココの子どもたち」は第一作の続きとして描かれ、友の死から立ち上がったココの結婚と子どもたちとの様子が描かれる。第79号には著者の名前がないが、第69号と第89号には一部同じ名前の記載が見られ、著者を変えながら楽しく物語を紡いでいく様子が推察される。

第29号「7つの頭を持つ獣」は7つの違う頭を持つ獣を倒した主人公が獣の舌を見せたことにより領主の娘と結婚する話であるが、章ごとに子どもによるリレー形式で書かれており、資料収集にもたくさんの子どもの関わった旨が記されている。

1934年に書かれた「グリ、グリニョン、グリネット」は、『麦束』の読者によって書かれた灰色のネズミの物語である。南仏を中心とした各学校のある町にネズミがやってきて、フレネの教え子と出会ったり、カーニバルに参加したり、スキーをしたり、各地域で様々な出来事が起こる。物語の中でネズミはフランス国内のみならず、アルジェリア、ドイツ、日本にまで旅をする。目次にあるだけで20の地域を巡っている（図5）。「グリ、グリニョン、グリネット」は、パリ近郊の学校に通う12歳の少女の文章から始まる。彼女の文章を受け取った各学校の生徒が、自分の地域の特徴を踏まえながら少しずつリレー形式で書き足していったと考えられる。読者が自然に著者に移行する好例である。

もし子どもたちが文章を書くことができなければ著者を読んで挿絵で参加することもできる。こうして読者が多様な方法で著者となり読者を作っていく連鎖を見ることができる。

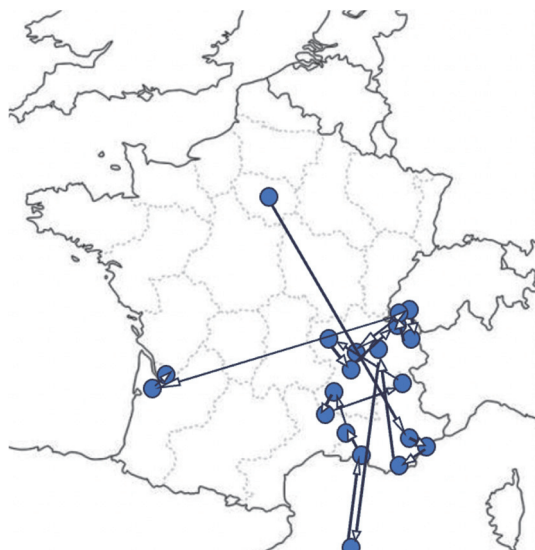


図5 「グリ、グリニョン、グリネット」の目次から見る
主人公のネズミの学校移動

3 学びの広がり

(1) 学びの広がり 量的考察

『童心』には基本的に文章を作成した学校名が明記しており、1940年3月までの『童心』には合わせて117校の学校名が記されている。前半(51冊)で72校、後半(53冊)で新たに45校の学校名が共同著者としてあがっており²⁷、1927年発行の作文集が9校の参加であったことを考えると次第に拡大していることがわかる。前半はフランス国内もしくはベルギー、ドイツの学校名しか見当たらないが、後半はウクライナ(USSR)、スペイン、アルジェリアの作品もあり、フィンランドやセネガルを舞台にした作品も登場する。さらに、1930年に発刊された第25号「死にたくなかった子猫」は、1939年に国際語であるエスペラント語に翻訳され発刊されていることから、『童心』はフランス国内にとどまることなく広くヨーロッパ、さらには世界中に使用されることを企図して作成していたと言える。

1929年、フレネは「協同学校カード(Fichier Scolaire Coopératif)」のプロジェクトを立ち上げた。彼の計画は、子どもたちのテキストを拡張することが可能な「読み物(lectures)」を出版することだった。同年、機関誌『学校印刷』において、「協同学校カード」という題で、フレネのカードに対する考えが示されている。

これらのシートの面白さ、そしてこれらの成功の確かな理由は、それに応じた柔軟な使用法、そして印刷設備があるうとなかろうと、購読者一人ひとりが自分の必要性に適合させることができる可能性にある²⁸。

フレネはカードの充実のために協力を呼びかけ、3ヶ月で40名の購読者を集めた。バレは「自発的な描写から考察へ」という題で、フレネが文章の交流のみで満足しなかった様子を以下のように述べている。

彼はその拡大を数行で体系化し、その日のテキストの下に

印刷し、調査(enquête)と呼んだ。例えば、子どもがヤギの話をした場合、クラスの子どもたちが何匹のヤギを持っているかを書き加える。次の日には、家族が飼っている家畜の表が作られる。別の日には、親が営んでいる職業を集計する。(中略) すぐに実施され印刷されて生活の本に残されるという小さな調査を通して、子どもたちの社会的な意識が形成されていった²⁹。

つまり、作文集『麦束』や『童心』は作文集として各校に読まれるだけでなく、学習材として更なる深まりと広がりを見せるきっかけとなっていたのである。作文集は国語を学ぶだけではなく、算数、理科、社会など、全ての教科に繋がり、学習材を増殖していった³⁰。

(2) 学びの広がり 質的考察

『麦束』、『童心』にはフランスに口承で伝わる民話も多く収録されている。バレは1929年に『童心』第9号に掲載された13歳と11歳の書いた「ピトシャン・ピトショ(Pitchin-Pitchot)」が、フランスや世界でよく知られた「袋に入れられた男の子(L'enfant dans le sac)³¹」を完全再現していることを指摘しながら、北欧やドイツにある民話の形と同一の「ペケナン(Péquénain)」という話が『麦束』第1号にすでに収録されていることに触れている。「ピトシャン・ピトショ」、「袋に入れられた男の子」と「ペケナン」との相違点として、名前の違い(主人公「ピトシャン・ピトショ」→「ペケナン」など)、内容の違い(「ピトシャン・ピトショ」では主人公は鬼に1度捕まる。鬼は真っ赤に焼けた鉄の棒に刺さり死んでいる。「ペケナン」では主人公が鬼に2度捕まり、犬が鬼の妻の鼻を噛み、鬼は皿から落ちて死んでいる)などがある。バレはこの「ペケナン」のフランスにおける存在を民俗学者も発見していなかったことに触れながら、子どもが物語を書き記すことの歴史的価値について、「もしすべての学校が彼の学校のように物語を集めていたら、専門家が自由に使える宝の山を手に入れることができただろうと夢想せずにはいられない³²。」と語っている。第4号「鉱山と鉱夫たち」、第8号「絹の国で」、第22号「移住者」のように、当時の様子を克明に記した作品は歴史的資料としても評価できる。子どもたちによる作品集は内容に学習材としての価値を含みながら作成する学校を拡大していき、併せてその学習内容は協同学校カードとして各教科へと網羅的に繋がっていった。例えば、一年の半分を一面の銀世界に包まれる学校の様子を描いた第55号「雪の国で」(1933年)を読んだ生徒が、協同学校カード429-431番「雪」(1935年)の製作や、地理や算数の学習に繋がったことは容易に想像できる。

第13号「子ども時代を通して」は、スペインで生まれ父の失業によりフレネ学校に来た13歳の子どもによる作品である。フランス語を覚える様子を以下のように記している。

ルソン先生は大柄な4人を指名して印刷をさせた。印刷所を見るのは初めてだった。ルソン先生は私たちに、文字がどこにあり、活字がどのように選び取られ、どのように組版され

るのかを説明してくれた。それから私たちは印刷を始めた。私たちはたくさんの失敗をした。鏡を見ながら修正しなければならなかった。今では、私たちはずっと巧みになった。私たちは皆、自分たちの文章を印刷したいと思った。フランス語のスペルや作文もかなり上達した。印刷は私にフランス語を教えたと言える。印刷万歳！

1936 年にフレネはスペイン内乱により難民となりスペインから来た子を 10 名程受け入れている。上の記述はスペインから来た子どもに勇気を与えたに違いない。他にも、バルセロナのフレネ学校の作文集を仏訳した第 78 号「レ・フルデ」や、フランスとセネガルの子どもの手紙によるやりとりを記録した第 103 号「セネガルからの手紙」など、フレネによる作文集は様々な形態を取りながらその地域や学習内容を拡大していった。

Ⅲ 子どもが著者となる意義

本節では、前節で明らかにした作文集の特徴を元に、子どもが著者となる意義について、教育関係の再構築の観点から明らかにしたい。

前節に見たように、フレネ教育における子どもは多様な形態により著者となる。自分のアイデアにより著者となるもの、他校からアイデアを得て著者となるもの、自分の特徴的な経験の受け入れや意味づけのために著者となるもの、学級の一員として推敲の意見を出し、協同著者となるもの、作品を読んだ後挿絵を描くことで協同著者となるものなど様々である。こうした容易に読者から著者となることのできるシステムがフレネにおける作文集の大きな特徴である。それではここからどのような利点が生まれるのか。

佐藤 (2022) が指摘するように、学校での学びが「所有」と「競争」の文化に支配されるのは、教師—子ども関係が固定化されていることが問題である。教師—子ども関係の固定化を解体し子どもの主体性を復権させるためにこれまで多くの提言がなされてきた³³。現実状況に合わせた教育関係を類型化したものとして、岡田 (2006) の関わりの四類型が挙げられる (図 6)。岡田は教

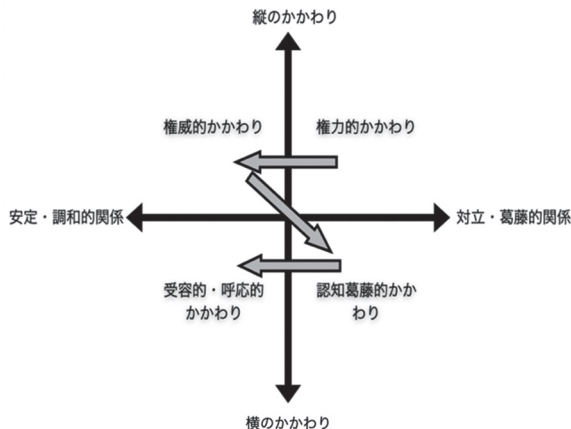
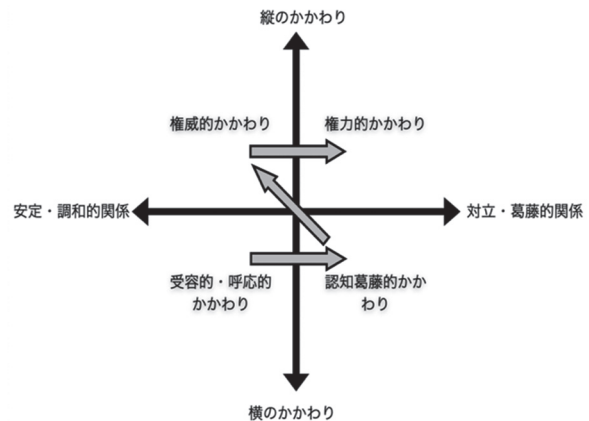


図6 教育的かかわりの四類型に見る、教師—子ども関係の移行
岡田敬司『かかわりの教育学』ミネルヴァ書房、1993 年参照

師—子ども関係の固定化の問題から多様な関係の提案をする。岡田は「教える—学ぶ」関係が、大人に促されてピアノに触れる子どもが音楽の楽しさに目覚めるように、縦のかかわり×対立・葛藤的關係である「権力的かかわり」の象限においてまず現れるとする。岡田は権力的かかわりが信頼関係の構築に従い、「権威的かかわり (縦のかかわり×安定・調和的關係)」に移行していくとする³⁴。しかし、信頼関係は、教えることの不完全性を呼び起こす³⁵。そこで、認知葛藤的かかわり (横のかかわり×対立・葛藤的關係) に移行する場面が必要となる³⁶。受容的・呼応的かかわり (横のかかわり×安定・調和的關係) の象限に至ると、相手の人格を無条件に信頼し、聞き合う関係が作られる。

教育的かかわりの四類型をフレネの作文集における子ども—子ども関係に援用しよう (図 7)。前節で見たように、子どもは



岡田敬司『かかわりの教育学』ミネルヴァ書房、1993 年参照

まず教室において、自分の思いを自由な表現の中で表出する (自由な表現の広がり)。教師が横のかかわりに降りてくることにより、自由な表現を受け止める雰囲気が出される (受容的・呼応的かかわり)。ここで教師や同級生から選抜され、推敲されて文章となる。独創性が期待される自由テキストにおいて他者との衝突は多産性を示す (認知葛藤的かかわり)。次に、安定・調和的關係の中で自由テキストとなり、協同の著者となり、他の子どもに読まれていくことにより (著者の広がり)、著者の子どもは権威を獲得する (権威的かかわり)³⁷。さらに、国内外の学校に文章を届け、学習材 (教材) または教科書となることにより (学びの広がり)、(協同) 著者である子どもと読者である子どもとの関係は、安定・調和的關係から対立・葛藤的關係に移行する可能性が生じる。つまり、子どもは権力を獲得する可能性を持つ (権力的かかわり)。もちろんここでの権力は、学校による教育システムや教師による指導の中での権力であり、純粋な子ども—子ども間での権力関係ではあり得ない。しかし、子どもが権力を持つ可能性を把持する実践を行うことが重要である。

先に見た「山の中の少年の物語」に影響を受けて作成された「4 人の若者の冒険 (実話)」や、多くの学校のリレーにより作成された「グリ、グリニョン、グリネット」、子どもの作文集から作成された他教科の学びに繋がる協同学校カードなどは、権力を持った子どもの文章が他の子どもの学びを生み出していると言える。子ども—子ども関係が、横のかかわりや安定・調和的關係にあるだ

けでは、学びがおしゃべりや共感の水準に留まってしまう。推敲や学習材（教科書）化（自由な表現の広がり、著者の広がり、学びの広がり）により、子ども—子ども関係が縦のかかわりや対立・葛藤的關係の可能性を持つことで、子どもの著者には見知らぬ他者（＝読者）への責任が形成され、著者は読者にとって尊敬、憧れの対象、または乗り越えるべき目標となる。

例えば、「山の中の少年の物語」の共同著者は他教室に対して責任を有し、権力（power）として他の子どもの前に現出する。「4人の若者の冒険（実話）」の協同著者は「山の中の少年の物語」の内容の面白さに惹きつけられ（権力的かかわりから権威的かかわりに移行し）、さらに前作を乗り越える作品を自分たちで作成しようと（多産性を生み出すための認知葛藤のかかわりへ移行しようとする。自由な表現や推敲により「4人の若者の冒険（実話）」は完成し、印刷され、他教室に届くことで、2作品は、相手の人格を無条件に信頼し、聞き合う関係（受応的・呼応的かかわりの象限）に達する。この流れは岡田の言う教師—子ども関係における移行と同一であると言える（図6）。さらに「4人の若者の冒険（実話）」は他教室において読まれることで権力として現出する。つまり、子ども—子ども関係の権力的かかわりが想定されることにより、読者が新たな著者となる学びの連鎖が生まれる基盤が創出されると言える。

教師—子ども関係で言えば、子どもを著者とする作文により、子ども—子ども関係が権力的かかわりを持つことで、権力が教師から子どもに（一部にせよ、あるいは一時的にせよ）移譲され、教師—子ども関係は教える—学ぶ関係の固定から解放される。これにより、教師は力動的に子どもと関わる事が可能となり、教師は、読者が著者となる学びの連鎖を創出する手助けをすることができると言える。先の例で言えば、「山の中の少年の物語」は、教師の承認により、意義のあるものとして他教室における子どもの前に現れる。つまり、子ども—子ども関係における権力的かかわりを現出させるのは教師である。教師は、教師—子ども関係をコントロールしながら子ども—子ども関係に当てはめて自由テキストを意義のある作品へと洗練し（図7）、「4人の若者の冒険（実話）」を完成させる。すなわち、教師は子どもに（一部、あるいは一時的な）権力を与えることで学びの連鎖を生み出すことができる³⁸。

子ども—子ども関係における権力的かかわりの想定は、教師—生徒の一方的教授関係（教師—子ども関係の固定化）による「所有」と「競争」の文化を解消する。さらに、著者と新たな著者という学びの連鎖を生み出す。まさに佐藤（2022）の希求する子ど

もたち自身が協同で探求する学び（「著者性」による「真正」の学び）である。フレネの作文集に見る子どもの著者化の実践は、子ども—子ども関係における権力的かかわりを想定することで、「真正」の学びを生み出す可能性を有していると言えるのではないだろうか。

おわりに

本稿では、フレネの作文集の成立過程と内容の考察から、自由な表現の広がり、著者の広がり、学びの広がりという特徴を解明した。また、子どもが著者となることの意義として、子ども—子ども関係が権力的かかわりを持つことで、教師—子ども関係の固定化による「所有」と「競争」の文化を解消し、自分自身の「知識」を持つ学び（「真正の学び」）を生み出す可能性があることを明らかにした。

本稿において論じたフレネの作文集の実践から、現代日本の作文教育にどのような示唆が得られるだろうか。筆者は学びが「所有」と「競争」の文化に支配されがちな現代にこそ、「真正性」の「知識」を生み出す「著者性」、「権力性」を教材（学習材）において確保、確立していくことが重要であると考ええる。

本自体の保管や発行に予算がかかり制約が多かった昔と違い、今はオンラインに載せることで簡単にたくさんの人が閲覧する環境を創り出すことができる。例えば、常にその時代にあった教育法を求めたフレネが現代にいたならば、きっと先に見た作文集をデジタル化するであろう。全国的（オンライン）作文集の発行、デジタルポートフォリオ、協同出版、教科書化など、様々な作文教育の実践を想定できる。こうした実践を行うにあたり、本稿で見たフレネの子どもの著者化の実践の集積を参考に、「著者性」や「権力性」を教材（学習材）に付与する方法を模索することによって、新たな実践は学びの連鎖を生み、「真正性」の「知識」を生み出す意義のあるものになるのではないだろうか。

本稿では、教育関係から見る著者の重要性について、フレネによる作文集の実践に限って論じた。作文教育における「著者性」、「権力性」の確保、確立の方法について、及びその際の教える—学ぶ関係のあり方については、フレネによる協同学校カードや学習文庫などの他の実践を含め、稿を改めて論じる必要がある。また、今回は内容解明の観点から、作文集の成立時期に焦点を当てて論じた。そのため第二次世界大戦以降の作文集の変遷については触れていない。フレネの作文集における第二次世界大戦後の変遷の考察は今後の課題としたい。

¹ 波多野完治「フランスの作文教育」『作文講座Ⅰ』明治図書、1968年、187-189頁。

² フレネは教材（matériel pédagogique）について、教材という表現を避け、単に、matériel（材）とだけ表現した。和訳では学習材と表現される。彼は、子どもたちにより様々な事物を教室に持ち込ませ、それを学習材にした学びを奨励した。

³ 佐藤は波多野のフレネ教育と日本の綴り方教育双方の不理解が重なり交流の接点が見出せなかったとする（佐藤広和『生活表現と個性化教育』青

木書店、1995年、159頁）。

⁴ 佐藤は「真正性（authenticity）」の語源が「著者（author）」を語源としていることに触れながら、多義的な「真正の学び」は「学習者が夢中になって現実世界を対象とする探求的で協同的な学びを遂行すること」に集約するとしている（佐藤学「学びにおける『著者性』と『真正性』」『教育研究』No.1444、不味堂出版、2022年、16-19頁）。

⁵ 佐藤広和『生活表現と個性化教育』青木書店、1995年、161-162頁。

⁶ コナックは他の3つの柱に協力、教育技術と教具、実験的試行錯誤を挙

げている (Connac S., « Freinet, Profit, Oury, Collot : quelles différences ? », *Spirale. Revue de recherches en éducation*, n°45, 2010, pp57-58)。

⁷ Go N., *Pour l'École moderne La pédagogie Freinet aujourd'hui*, Chronique Sociale, 2022, p117.

⁸ バレ (Barré M.) やアッカー (Acker V.) はフレネ教育を歴史的に論じの中で作文集の変遷について触れている (Barré M., *Célestin Freinet un éducateur pour notre temps 1896-1936 Les années fondatrices*, PEMF, 1996. Acker V., *The French Educator Célestin Freinet*, Lexington Books, 2007)。

⁹ 筆者は2012年3月、2015年3月、2023年2月にいずれも1週間程度のフランスの学校訪問及び資料の収集を実施した。資料はヴァンスのフレネ学校教室及び資料室、フランス国立図書館 (Bibliothèque Nationale de France)、フランス国立中央文書館 (Archives Nationales)、などで収集した。またインターネット上においては、現代学校協同組合 (Institut Coopératif de l'École Moderne) (<https://www.icem-pedagogie-freinet.org>) および Amis De Freinet (<https://www.amisdefreinet.org>) にてスキャンされた資料を参照した。

¹⁰ 宮ヶ谷徳三著『仕事の教育 世界新教育運動選書 16』明治図書、1986年、31-33頁。

¹¹ 同上書、41頁。フレネがダニエルと学校間通信を始めた年は明確ではない。1921年にフレネとダニエルが知り合いになっていたこと、1924年にフレネとダニエルが印刷機を教室に導入したことから、宮ヶ谷は1924年としている (同上書、34頁)。

¹² バレは、著者が分散して雑誌を印刷するという、前例のないこの方式は評判を呼び、シリーズ化されることになり、1930年には印刷機を使ったグループ印刷に、そして1932年にはプロの印刷会社による本格的な子ども向け雑誌がこつながつたと述べている (Barré M., *op cit.*, tome 1, p41)。

¹³ *Extrait de La Gerbe*, Édition de l'imprimeur l'école, n°1, 1927.裏表紙。

¹⁴ 宮ヶ谷徳三訳「もう教科書も授業もいらぬ」前掲書、130-136頁参照 (Freinet S., « Plus de manuels scolaire ! Plus de leçons ! », *Brochure d'Education Nouvelle Populaire*, 1937)。

¹⁵ 同上書、41頁。

¹⁶ 『童心』には初めは対象年齢の記載がなかった。1950年の157号から、過去に出版された作品も含め全ての号に対象年齢の記載がなされている。

¹⁷ 第102号増刊号「フィンランドにて」は記載がなかったため計上していない。

¹⁸ フレネに賛同する教師らを中心に構成される組織。作文集の収集や発行の中心となっていた。

¹⁹ フレネ反対派が学校の窓ガラスを割って突入し、フレネが公立の小学校教員の退職に追い込まれた事件。フレネがヴァンスのフレネ学校を立ち上げる契機となった。

²⁰ ドラリュ (Delarue P.) は、想像性豊かに様々な悪魔や魔法、怪物などの登場するドイツの民話と比べ、フランスの民話の特徴は、単純化されて質素で人間味のある穏やかさを持つという。『童心』の傾向はドラリュの説と一致している (新倉朗子編訳「フランスの民話について」『フランス民話集』岩波文庫、1993年、358-378頁)。

²¹ Acker V., *op.cit.*, p66.

²² Ibid, p65.

²³ Barré M., *op.cit.*, tome 1, p68.

²⁴ « Documents et attestations », *L'Éducateur Prolétarien* n°4 - année 1932-1933, Éditions de l'Imprimerie à l'École, 1933, p208.

²⁵ Ibid, p69.

²⁶ フレネは、自由テキストは生徒に誇りに思わせるものであり、そのため、テキストは完璧で、誤植があってもならず、生徒は自分の仕事に誇りを持ち、誤植によってテキストが台無しになってはならない。そのため、教師は印刷前に最終的な承認を与えなければならないとしている (Freinet C., « Le journal Scolaire », *Éditions Rossignol*, Montmorillon, 1957, pp35-38)。

²⁷ 第51号「平原は海のように広い」と第81号「ボルソーニユの物語」については完全な内容が確認できなかったため計上していない。

²⁸ « LE FICHIER SCOLAIRE COOPÉRATIF », *L'imprimerie à l'école*, n°20, février, 1929, pp6-7.

²⁹ Ibid, p71.

³⁰ 1954年までに、学習材として1000枚ほどの協同学校カードが発行されている。本の形を採る学習文庫 (bibliothèque de travail) も現在に至るまで製作が続けられ、1000冊近く作られている。

³¹ この作品は日本においても絵本として出版されている (山口智子再話『ふくろにいれられたおとこのこ』福音館書店、1989年)。なお、フレネの幼児学級から生まれた物語「くろうまブランキー」も日本において出版されている (伊東三郎再話『くろうまブランキー』福音館書店、1958年)。

³² Barré M., *op cit.*, tome 1, p68.

³³ 渡邉隆信「教育関係論の問題構制」『教育哲学研究』第100号、2009年、高橋勝・広瀬俊雄編著『教育関係論の現在「関係から解読する人間形成」川島書店、2004年などに詳しい。

³⁴ 岡田は権力と権威の違いについて、権力は強制的に他者を服従させるもの、かつ、功利主義的理性が育まれるもの、権威は他者を自発的に服従させるもの、かつ、信頼、規範意識が強化されるものとする。彼はピアジェ (Piaget J.) による他律の道徳が余計な回り道であるという所論への反駁を元に、権力的かわりによる他律の道徳も自律の道徳の前段階として後に続く発達基盤となりうるとしている (岡田敬司『かわりの教育学[増補版]—教育役割くずし試論—』ミネルヴァ書房、2006年、12-56頁)。

³⁵ 岡田は、教える者の権威が教えられる者の従順によって迎えられる時、伝達が最も円滑に行われることに異論の余地はないとする一方で、教える側の権威は永続的な唯一性や排他性を伴いやすく、権威が精神の鎧となり、時として教えられる側の成長を妨げるとする (同上書、66-90頁)。

³⁶ 岡田は、独創性が期待される課題において他者との衝突は多産性を示すとしている (同上書、152頁)。

³⁷ 佐藤 (2022) も指摘するように、「著者性 (authorship)」 「真正性 (authenticity)」と同様、「権威 (authority)」の語源も「著者 (author)」である (前掲書、17頁)。

³⁸ 木村 (2003) は、教師と子ども、子どもと子どもの相互的コミュニケーションによって自律的に生み出される権力 (合意の権威) を組織することこそ教師に求められる役割であるとする。合意の権威を創造することで、教師の全般的なイデオロギー的権力は重要ではなくなる (木村浩則「教師の〈権威〉と何か」山崎英則編『教育哲学のすすめ』ミネルヴァ書房、2003年、64頁)。